

# 令和五年度 卒業証書授与式 式辞

冬の寒さが和らぎはじめ、日差しが日に日に暖かさを増し、新たな季節の到来を感じる早春のこの佳き日に、御来賓並びに多くの保護者の皆様のご臨席を賜り、ここに大阪府立牧野高等学校第四十六回卒業証書授与式を挙行できますことは誠に慶びに堪えませぬ。

只今、卒業証書を授与されました牧野高等学校第四十六期二百七十一名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。牧野高校を代表して、皆さんのご卒業を心から祝福いたします。

保護者の皆様には、本日、ご卒業の日を無事にお迎えになられましたお喜びは、いかばかりかと拝察いたします。心よりお祝い申し上げますとともに、ご入学以来、本校の教育活動にご理解ご協力を賜りましたことに、改めて感謝とお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

また、本校学校運営協議会会長松宮新吾様をはじめ、本日の式のためにわざわざお越し下さいました御来賓の皆様、ご臨席を賜り、誠にありがとうございました。

さて、卒業生の皆さん、今から四年前、皆さんが、中学三年生の時、新型コロナウイルス感染症が世界を大混乱に陥れました。学校は休校になり、三つの密を避けるため、友達でさえ、手を伸ばしても届かない距離をとり、食事の際は会話をしない黙食など、コミュニケーションの自由がなく、おしゃべりや悩みの相談も気軽にできない中、皆さんは受験勉強に励み、見事本校に合格をされました。

入学後も感染症の収束は見えず、一年生の時は体育祭は中止、文化祭も三年生の保護者を除き原則無観客での開催でした。その後、感染対策をしながら社会経済活動を行うという国の方針転換のもと、二年生の時、体育祭が三年ぶりに復活をしました。

在校生全員が初めて経験する行事で、準備や競技のノウハウもない中、皆の気持ちが一つにまとまった本当に素晴らしい体育祭でした。閉会式の際の体育委員長の涙に、私も思わずもらい泣きしたことを覚えています。文化祭でも食堂前のステージが復活し、様々な音楽に合わせたクラス全員参加のダンスは、多くの観客を釘付けにしました。

修学旅行先の熊本や鹿児島では、行く先々で笑い声がおき、レクリエーションは声枯れるくらいの大盛り上がりとなりました。そして今年度、新型コロナウイルスは感染症法上の五類に分類され、毎日の全国の感染者数の報道もなくなり、長い間かかっていた霧の中に光が差し込み、視界が開けていくように感じたのは私だけではなかったと思います。

体育祭では、早朝まで降っていた雨が急に止み、暑くもなく絶好のコンディションの中、いくつもの感動が生まれました。文化祭では、皆さんのパフォーマンスを結集してくれました。部活動の公式戦も有観客、声出し可になり、皆さんの当たり前前の高校生活は僅か一年間だけでしたが、この三年間で大切なことを多く学ばれたことと思います。

この数年、私たちの生活は、目に見えない小さなウイルスによって翻弄されてきました。そのような中、私は、ヒトは「自分に弱い生き物」であるとともに、「自己防衛本能から「他人には厳しく、攻撃的になる」という特徴があることに、改めて気づかされました。

例えば、感染症を拡散させないため国が緊急事態宣言を発令し、外出自粛を要請しても、意思が弱く、「これくらいなら、大丈夫」と会食に繰り出す人がいました。一方で自粛警察という言葉のとおおり、「社会の規範からはみ出している人がいなか」を見張って、勝手なことをした人を激しく攻撃する人もいました。

このように、人は誰もが多かれ少なかれ、自分には弱く、他人には厳しくするという相反する性（さが）を持っています。私たちは、その時々状況によって、無意識にこれらの性を使い分け生活しています。このことが、今回のコロナの流行によって浮き彫りになり、他人との関わりがより難しい社会になったように思います。

では、本日、本校を卒業し、社会に出られる皆さんは、これからどうすればよいと考えるでしょうか。

牧野高校での皆さんの高校生活を思い出して下さい。三年前、中学校を卒業したばかりで、身体的にも精神的にもまだ幼かった皆さんは、牧野高校に入学しました。知らない人がほとんどで、最初、皆さんは不安でいっぱいだったのではないのでしょうか。

先輩方や周りの人たちを見て、自分の弱さやできていないところに気づいて、自信をなくしたこともあったと思います。しかし、だからこそ、お互いに助け合い協力することの大切さを学び、その結果、幾多の困難を乗り越え、強く、たくましく成長し、本日を迎えられたのではないでしようか。

人類の歴史を振り返った時、ヒトはいくつもの危機に直面しましたが、それを克服し、新しい文明を築き、現代まで生き抜いてきました。多大な犠牲を払って得たコロナの教訓は、人はやはり助け合って生きていく存在であることの再確認だったように思います。

私たちは、互いの弱さを受け入れ、強さも受け入れる。この考えが人と関わる際のベースであるように思います。言い方を変えれば多様性を尊重するということでもあります。異なる文化や慣習、価値観などを受け入れ、それらを活かして共生していくことができるようになれば、これからの世界はもっと人に優しく暮らしやすいものになるだろうと思います。それが実現できた時が、本当の意味でのポストコロナの社会と言えるのではないかと考えています。

しかし、現実には、山積する様々な社会課題の解決は容易ではなく、正解が見つからないかもしれないかもしれません。けれども、その時点での最適な答えは必ず存在します。ですから困難な問題に直面したとき、誰かが考えてくれるだろうと人に頼ったり、社会のせい、時代のせいと責任をどこかに求めるのではなく、皆さんには、ぜひ自分の頭で考え、行動する人になってほしいと願っています。

最後に、今、皆さんが手にされた卒業証書は、皆さん一人一人の努力によって得られたことはもちろんですが、その陰には深い愛情を持って見守って下さったご家族、先生方、友人など多くの方の励ましや支えがありました。このことも決して忘れることなく、感謝の気持ちを持つようにしてください。

それでは、みなさん、ポストコロナ社会をどのように生きるのか、自分なりに考え、答えを見つけ、新たな未来を創り上げていって欲しいと思います。

皆さんの前途を祝し、これからの限りないご活躍とご発展を心から祈念して式辞といたします。

卒業おめでとう。

令和六年三月一日

大阪府立牧野高等学校

校長 高松 智